

性的マイノリティの市民活動における 「可視性の政治」を問い直す ——東北地方の団体主催者の実践から

杉浦郁子 *SUGIURA Ikuko*

- はじめに
- 1 ——「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査」の概要
 - 2 ——「可視性の政治」に埋め込まれたメトロノーマティヴィティ
 - 3 ——「露出」を管理する実践
 - 4 ——「露出」を前提にしない実践
- おわりに

【要旨】性的マイノリティの権利獲得運動では、「不可視であること」を解決すべき問題と見なし「存在や困難の可視化」を目標として共有してきた。そのため、運動を牽引する者らは、性的マイノリティの当事者として自己開示することで、一般社会と対話を重ねることを要請されてきた。

しかし、たとえ活動のリーダーであっても、カミングアウトは簡単なことではない。本稿は、東北地方で性的マイノリティのための活動に取り組む団体主催者へのインタビューから、かれらが「可視化」の要請をどのように経験してきたのか、また「可視化」の要請にどのように取り組み、対処してきたのかを明らかにする。インタビュー協力者らの経験や実践を通して、市民活動の担い手の多様なあり方を示すとともに、可視化を強調する運動を「地方」の視点から批判的にとらえ直すことを試みる。

本稿の問題意識は、「可視性の政治」を強調することが「地方」の性的マイノリティの生活や活動、可視化以外の運動手法を周縁化する効果をあわせもつ、という点にある。まさに周縁化の対象となってきた「東北」のアクティヴィストたちは、自らの「露出」を管理したり、「露出」を前提にしない手法を模索してきた。その実践の合理性と、その実践がもつ「周縁化」への抵抗の契機を考察する。

——はじめに

「カミングアウト」という言葉は現在、性的マイノリティが自己を開示する行為を広く指して使われている。性的マイノリティの一人ひとりにとって、カミングアウトをするかどうかは、相手との関係性や置かれている状況に応じて選択や判断を迫られる生活課題である。他方で「カミングアウト」という概念は、社会変革の可能性を託され過剰な意味を背負わされてきた、という歴史を有している（川坂2008）。

「カミングアウト」は、1970年代のアメリカで盛り上がりを見せたゲイ解放運動を通じて知られるようになった概念である。運動の文脈において、カミングアウトによる可視化は、解放や抵抗、生存のための政治的な実践として位置づけられてきた。同時に「不可視

であること」は、「望ましいとはいえない状態」として受け止められてきた。このような受け止めは、解放運動のみならず、運動と結びついたレズビアン／ゲイ・スタディーズ、そしてマイノリティ個人にも、多かれ少なかれ見られるものである。

大坪真利子 (2020) は、「カミングアウトをしないという選択」や「していない状態」が推奨されていない、という状況について、次のようにまとめている。

現代では、カミングアウトは個人の選択であり、強制されるべきではないという認識が共有されている。それでも、「性的マイノリティが不可視である」ことを踏まえれば、カミングアウトの実践は「倫理あるいは運動などの観点から意義をもつこと」と強調されつづけている。他方、カミングアウトをしていない状態とは、「批判されるべきではないが、少なくとも倫理あるいは運動などの観点からは推奨されない状態」として、微妙な立ち位置を与えられている。(大坪 2020: 42)

「不可視」を解決すべき問題と見なし「可視性」を向上させるという目標は、とりわけ活動のリーダーらに要請されてきた。そして実際に、かれらは、自ら性的マイノリティの当事者として「表に出ていく」ことで、一般社会との対話を試みてきた。カミングアウトをとまなう対話の積み重ねが、日本社会の「性の多様性」に対する理解を促進してきたことは、疑いようがない。

しかし、たとえ活動のリーダーであっても、カミングアウトは簡単なことではない。本稿は、東北地方で性的マイノリティのための活動に取り組む団体主催者へのインタビューから、かれらが「可視化」の要請をどのように経験してきたのか、また「可視化」の要請にどのように取り組み、対処してきたのかを明らかにする。インタビュー協力者らの経験や実践を通して、市民活動の担い手の多様なあり方を示すとともに、可視化を強調する運動を批判的にとらえ直すことを試みる。

本稿の構成は次のとおりである。第1章では、筆者が共同研究者とともに実施した「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査」の概要を述べる。第2章では、性的マイノリティの可視化を要請する権利獲得運動の手法を「地方」の視点から批判的に検討し、本稿の問題意識を明確にする。議論を先取りすると、可視化を重視することにより、都会以外の性的マイノリティの生活や活動、可視化以外の手法を周縁化する可能性があることを指摘する。「東北」はまさに周縁化の対象となってきた場所であるが、続く第3章と第4章では、東北地方の団体主催者らが可視化——「顔出しをする」「表に出ていく」と表現されるような「露出」——の要請にどのように向き合っているのかを分析する。具体的には、「露出」を管理する実践、「露出」を前提にしない実践を紹介し、それらの実践がもつ「周縁化」への抵抗の契機を考察する。

1 ―― 「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査」の概要

「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査」は、東北地方における性的マイノリティのコミュニティの展開を、東日本大震災との影響関係および他地域との共通点・相違点に注目しながら明らかにすることを目的に実施された。この目的にもとづいて、市民団体スタッフへのインタビューを行った。

インタビューでは、①プロフィール（年齢、出身、転居歴、職業、家族構成など）、②現在かかっている団体や活動（団体の活動内容、団体発足の経緯、活動に参加した動機など）、③活動と地域（活動エリア、他団体・行政との連携や協働、大都市圏との比較、地域性、震災の影響など）、④これまでの活動に対する評価、⑤今後の活動や課題、の5項目について質問した。

インタビュー実施期間は、2018年7月から2019年8月である。調査の依頼および実施は、共同研究者である前川直哉（福島大学）と筆者とで行った¹⁾。インタビューの実施場所は、協力者の活動エリアにある公共施設、喫茶店の個室、自宅など、プライバシーを守れるところだった。

インタビューを始める前に、協力者にインタビューの進め方や公表までのプロセスを口頭で説明し、インタビュー承諾書に協力者と調査者が署名した。承諾書は2部作成し、1部を協力者が、もう1部を調査者（杉浦）が保管している。

インタビューにかかった時間は、おおむね2時間から3時間だったが、協力者の活動期間が長い場合は、4時間以上かかることもあった。インタビューのやりとりは録音した。

インタビューの音声は、業者に依頼して書き起こし、それにもとづいて調査者が読みやすい形に編集した。時間の流れにそって出来事を配列したり、項目ごとにまとめたりした。調査者の発話を省略し、協力者が一人称となる文章にしたが、できるだけ協力者の使った言葉で記述するようにした。

編集した原稿を協力者に送り、公表には不適切だと思われる表現や内容、事実誤認を修正してもらった。修正を反映したレイアウト原稿（版下）を作成し、協力者に再度の校閲をお願いした。

以上のプロセスを経て完成した原稿を「データ」とし、『東北地方の性的マイノリティ団体活動調査報告書』において発表した（2021年2月発行）。報告書には、東北6県の19団体、23名のインタビューが掲載されている²⁾。本稿で紹介する語りはすべて、報告書からの引用である。

2 ―― 「可視性の政治」に埋め込まれたメトロノーマティヴィティ

性的マイノリティの可視化を要請する権利獲得運動の手法は、「可視性の政治（politics of

visibility, visibility politics)」と呼ばれる。近年、この手法を強調しすぎることにまつわる問題が「地方」の視点から指摘されるようになってきている。どのような問題があるのか、本章で論点を整理する。

2-1 都市と性的マイノリティの親和性をめぐる議論

まず、アメリカ史におけるある有名な議論を紹介するところから始めたい。それは、「ゲイ・コミュニティの形成は、産業資本主義化による都市の発展なしには起こりえなかった」という、ジョン・デミリオ (John D'Emilio) の議論である (1983=1997)。

資本主義は一部の男たちや女たちが同性への性愛的／情緒的関心をもとに個人生活をつくりあげていくことを可能にする諸条件を創出した。このことは都市部でのレズビアン／ゲイコミュニティの形成を、そしてより近年のものとしては、性的アイデンティティを基盤とした政治行動を可能にしたのである。(D'Emilio 1983=1997: 149)

デミリオの議論を補足しながら説明しよう。農業など第一次産業を中心とする社会において、人々は、家族や地域の一員として働くことでしか生存できなかった。しかし、資本主義経済の発展は、企業に雇われて賃金を得るという労働を普及させ、個人は製造業やサービス業が集まる都市部に移住して仕事に就き、家族から離れて生きられるようになった。

産業化は「性(交)」の意味も変化させた。生産性の低い小規模な農家や商家などでは、労働力としての子どもを必要としたため、性と生殖とが強く結びついていた。対して都市部の労働者は、生殖という「義務」から自由になり、愛情表現としての性を謳歌できるようになった。このような歴史過程がレズビアン／ゲイのライフスタイルやコミュニティ、性的アイデンティティにもとづいた政治行動の出現を条件づけた。

デミリオは、20世紀後半のアメリカを観察して「性的マイノリティのコミュニティ形成や解放運動の隆盛には都市化が不可欠だった」と述べたが、アメリカのみならず日本でも、性的マイノリティの集会的な活動は、都市部を中心に展開してきた。この事実によって、都会と性的マイノリティの生／性との「相性の良さ」は、自明のことであり続けてきた。

2-2 「地方は生きづらいという言説」と「カミングアウトによる進歩の物語」

「性的マイノリティにとって都会は生きやすい」という見方は、「地方は生きづらい」という見方と相互構成的であるが、後者の見方が現代日本に存在していることは、横山陸(2019)によって例証されている。

横山は、1990年代から2019年4月までの新聞報道や当事者の手記などから、性的マイノリティにとっての「地方」「田舎」がどのように語られてきたのかを検証している。その

分析によれば、「地方」「田舎」を「性的マイノリティが生きづらい場所」として位置づけた語りが最頻出であり、新聞に限れば、収集した記事の約8割にこの語りが見られる。「生きづらい理由」としては、「コミュニティの狭さ・緊密さ・閉鎖性」「『ジモト』であること」「保守的な性役割意識」「性的マイノリティに対する偏見の強さ」「カミングアウトの困難と可視性の低さ」「当事者コミュニティの弱さ」「制度などの整備の遅れ」などが言及されるという(横山2019)。このように、「性的マイノリティにとって地方は生きづらい場所である」というイメージは根強い。

空間を「都市」と「それ以外」とに分割し、後者に好ましくない状態や傾向を割りふることで、前者を好ましいものとして描き出す。このような二項対立的な認識枠組みは、デミリオが記述したような「コミュニティや解放運動の歴史」にも埋め込まれている。その歴史を単純化すれば「都市部の住人がカミングアウトをし、声を上げてきたことで社会を変えてきた」という「進歩の物語」である。

「可視性の政治」を批判的に検討したカーリー・トムスン (Carly Thomsen) は、「可視性は、進歩の物語を可能にし、明確にする (articulate) ための装置 (mechanism) である」(Thomsen 2016: 247) と論断する。性的マイノリティが「姿を現し、声を上げ、誇りをもっていられる (can be “out, loud, and proud”)」ということは、「抑圧されていた時代を乗り越えて我々の社会が進歩してきた証拠」だと見なされている。可視化は、常に「進歩」の証拠となり、同時に、さらなる「進歩」につながると考えられてきた。そして、「進歩」を推し進めてきたのは主に「都会」の人々である。よって、「コミュニティや解放運動の歴史」とは、「都会の歴史」であり、また「カミングアウトによる進歩の物語」である。

しかし、こうした物語は、地方や田舎を「カミングアウトによる可視化戦略をとることのできない後進的な場所」として仮構しないでいられない。運動の目標として、あるいはその結果として「可視化」を強調することは、地方を周縁化するイデオロギーとして機能してしまう側面があるのだ (Thomsen 2016: 261)。

2-3 メトロノーマティブな物語

「都市／地方」の二項対立的な認識は、コミュニティに関する大きな物語だけに埋め込まれているわけではない。それは、性的マイノリティ個人の経験をも枠づけてきた。この点について、キャサリン・シュヴァイクホフアー (Katherine Schweighofer) は、「クローゼットを再考する (Rethinking the Closet)」という論文で次のように述べている。

クローゼットという概念は、現代のゲイのアイデンティティを定義し、理解するうえで不可欠な要素となってきた。クローゼットであることは、ゲイの青春物語の一部であり、大人になってオープンになり、受け入れられ、幸せになる前の状態である。この時系列的な物語は、地理的な物語にもマッピングされている。つまり、地方から都市への移動が、子どもから大人への移動と、クローゼットからアウトへの移動の上に

重ねられているのである。この物語は次のようなものである。若いゲイが、LGBTQ コミュニティの外の、非都市的な空間で暮らしていた。ある日、自分が人と違うことに気づき、田舎の環境を捨てて大都会に向かい、そこでゲイであることをカミングアウトする。その後、都市部のゲイ・コミュニティに受け入れられて、幸せに暮らす。多くのレズビアンやゲイの現実、とくにバイセクシュアル、トランス、クィアの現実 は、この架空の物語に当てはまらないが、物語の構造化された諸要素は、個人、コミュニティ、そしてクィア・アイデンティティの理論に影響を与え続けている。(Schweighofer 2016: 227)

性的マイノリティが語る自分史には、「クローゼットからカミングアウトへ」という移動のプロットがよく見られる。この移動に、「子どもから大人へ」という時間的な移動と、「田舎から都市へ」という地理的な移動が重ねられる。成長物語は「発達」や「成熟」という観念とも結びついており、「人間は（直線的に）発達する」という前提のもと、前者より後者が「より望ましいもの」とされる。

この物語のなかで、田舎や地方は「暗く狭い押し入れ（クローゼット）」という比喩とともにある。それは、いつまでもいられない場所、いつか抜け出さずにはいられない場所であり、そこからの脱出を果たすことで性的マイノリティは大人になっていく……³⁾。

このように、「クローゼット／カミングアウト」という二項対立を「地方／都市」という空間的なカテゴリーに重ねた物語のことを、Jack (Judith) Halberstamは「メトロノーマティブな物語 (metronormative narrative)」(2005: 36-37) と呼んだ。メトロノーマティブとは、都市的なもの (metro) を標準的な状態 (norm) と見なす規範のことである。

「都市」と「可視性」を「望ましき」でつないだこの規範は、コミュニティの物語や個人史のなかで反復されている。また、「性的マイノリティのアイデンティティやコミュニティは、都市の可視性と切り離すことができない」というメトロノーマティブな暗黙の了解は、性的マイノリティを対象にしてきた研究にも刻まれてきた。それらは、地方や田舎で生きる人々を「クローゼット」に押し込める、という言説上の効果を有するものである。

2-4 地方の周縁化と不可視化——可視性の政治の意図せぬ効果

「地方＝クローゼット」「都市＝カミングアウト」という概念的な結びつきが強固な状況において、「カミングアウトによる進歩」、すなわち「可視性の政治」を重視することには、どのような問題があるのだろうか。すでに述べたことを踏まえながら整理してみたい。

まず、可視性の政治は、意図せずに都会以外の性的マイノリティの生活や活動を周縁化し、結果としてそれらを不可視化する、という問題がある。可視性の政治は、「可視化が解放や権利獲得のために不可欠である」という考え方を強化する。それと同時に、不可視性を「政治的でないもの」「避けなければならないもの」「消滅させなければならないもの」として構築する。こうした認識が流通するなか、都会と同じような可視化戦略をとりづらい

場所は、「後進性」という負の価値を背負わされる。また、地方に住む性的マイノリティは、クローゼットの中で力を奪われている存在、コミュニティの支えのない脆弱な存在、ときには無知な存在だと想像される。現代日本の「地方」は、必ずしも可視性の政治が不可能な場所ではないが、不可能だと想像されることによって、地方の様々な活動が見過ごされてしまう。

さらに、可視化を重視しすぎること、コミュニティや活動を創出するための「可視化以外の別のやり方」が相対的に軽視される、という問題もある。たとえば、当事者のための居場所を創出するためによく用いられてきたやり方は、「目立たないように活動する」、つまり、クローゼットであること、存在を誇示しないことで当事者を引き寄せるといったものである⁴⁾が、このような可視性を目指さないやり方は、注目を集めにくい。しかし、地方では——そしておそらくは「都会」と呼ばれる場所でも——様々な「別のやり方」が駆使されている。

筆者らが行ったインタビューが示しているのは、「クローゼットだからといって何もできないわけではない」ということであった。「アウトでないこと」は「行動できないこと」に直結しない。「クローゼットであること」が活動を制限するとは限らない。「カミングアウト」がかえって活動を難しくすることもある。可視性の政治が有効でない文脈は、いたるところにある。そうした文脈でなされている「別のやり方」を「可視性の程度」というものさしで測るのは適当でない。また、そのやり方が記述されないのは、コミュニティや活動にとって損失である。

もちろん、可視性が政治的なパワーになることは明らかである。しかし、いつでもどこでもどんなときでも可視化が目指されているわけでもないのも確かである。筆者は、東北地方の活動で採られている様々な「別のやり方」に注目し、性的マイノリティによる活動手法の柔軟性を明らかにしていきたいと考えているが、本稿では手始めに、団体の主催者が「可視化」の要請にどのように対峙しているのか（きたのか）という点に照準して、そのやり方を具体的に紹介する。

3 — 「露出」を管理する実践

3-1 「露出」の啓発効果

性的マイノリティの「可視化」には様々なレベルがあるが、以下で注目するのは「顔出しをする」「表に出ていく」と表現されるような実践である。いまどきの言葉では「露出」がそれにあたるだろうか。つまりは、性的マイノリティとして、主にメディアを使って他者の前に現れ、認知されることである。「露出」は、後述するように、活動のリーダーらにとって大なり小なり「負担」と受け止められている事柄である。

とはいえ、露出の啓発効果は大きい。その背景には、冒頭で引用した大坪が指摘した問題がある。それは、「性的マイノリティが識別可能とならない限り、対面・表象問わず、その

場に性的マイノリティが存在しないものと扱われる」(大坪 2020: 45) という問題であり、また、言われるまで知らなかったのだから、適切な配慮や制度設計ができなくても仕方がない、といった免罪符が幅を利かせている (大坪 2020: 46) という問題である。

リーダーらの露出は、そうした問題があることを踏まえての戦略である。露出は、「見た目からは性的マイノリティであることはわからない」ことをわかってもらう、ひとつの方策である。見た目でわからないことを伝えるために、身体とともに現れ出る。そのうえで、「身近にはいないというが、知らないだけで必ずいる」「だから、どこにでもいることを想定したコミュニケーションや制度設計をしてほしい」と訴えていくのである。

露出は、メディア取材や講演などを通してなされるが、それらを引き受けるのは、団体の代表の役割だと見なされやすい。「顔出しできる発信者」は、アクティビストの典型的なイメージかもしれない。このイメージに引きずられ、私たちは活動のリーダーに「表に出ていく」ことを当たり前のように期待してきた。

このような周囲からの期待を知るリーダーたちは、露出することにどのように向き合っているのだろうか。

3-2 ソウ——「スクランブルエッグ」

青森県で 2008 年に「スクランブルエッグ」という団体を立ち上げたソウは、活動を始めたときの知人の反応を次のように語っている。

首都圏にいたときは、市民活動は全くやっていなかったです。何だか押し付けっぽい感じがしてしまって、むしろ嫌いでした。だから、オフ会で出会ったバイセクシュアルの子がいじめられている、ということがなかったら活動はしていなかったですし、「今ここで静かに暮らしているのに、なんでわざわざ」という気持ち、私たちの話を聞きたくないという人の気持ちもわかるんですよ。

自分が活動を始めたときも、オフ会の知り合いから反対されました。「顔を出して表に出ていくんだったら、あなたと一緒に歩けないし、もう一緒にやれなくなる」「あなたのパートナーとか家族にも害が及ぶかもしれないよ」「そういう覚悟してるの?」「それでもやるの?」と言われました。自分もそれまでその知り合いと全く同じことを考えていました。でも「それでも自分は悔しいから、やれることをやってみる」と伝えました。(杉浦・前川 2021: 47-48)

「顔を出して表に出ていく」活動を始めようとしたとき、周囲の反応は厳しかったという。クローゼットの当事者は、カミングアウトをしているアクティビストと一緒にいるところを、誰かに見られるのを恐れる。狭い街である。地元の繁華街をともに歩けば、知り合いに目撃されるかもしれない。誰何されたらどう応じたらいいのか。自分もそうなのではと疑念をもたれるのではないか。こうした不安を現実のものとしてもっている。

ソウは、スクランブルエッグを始めた翌年の2009年にはラジオ出演を、2010年にはテレビ出演をしている。当時は、地元ではない市に住み、上司にカミングアウトをしていたという事情が「顔出し」を可能にした。

カルチュアロードでは、弘前市のコミュニティFM「アップルウェーブ」が取材をしていました。チラシを持って行ったところ、その後に「番組に出ませんか」と声をかけていただきました。地元の人を取り上げて、どのような活動をしているのかを紹介する「津軽いじい館」という番組で、アライ⁵⁾のメンバーと一緒に出ました(2009年11月2日)。

翌年には、映画祭のつながりでご連絡いただいて、NHKのテレビ番組にも出るようになりました。顔を出しての生出演でした。当時は、青森市にいて、アルバイトの身分で、上司にカミングアウトして勤めていたので、あまり顔を隠していませんでした。(杉浦・前川2021: 47)

地元での活動はハードルが高かったものの、首都圏で暮らした経験が気持ちを楽にさせたという。

地元で活動するのはハードルが高かったですが、でも5年ぐらい関東のほうにいたので、いつでも逃げられると思っていました。サークルを始めたときも「最悪、弘前から逃げればいいや」という気持ちでした。

クローゼットのメンバーたちを表に出さないように、団体登録は自分の名前でしたし、取材や出演も自分が受けていました。他に受けたい人がいれば別ですけどね。そういうふうに来てきたので、最初の頃は「スクランブルエッグって他にメンバーいるの?」と見えていたと思います。(杉浦・前川2021: 53)

団体の設立当初から代表として「表に出ていく」役割を一手に引き受けてきたが、その後、地元根を張ったことで、「いつでも逃げられる」というわけにはいかなかった。今は「地元紙には顔も名前も出さない」ようにしている。

でも、うっかり地元で自営業を始めてしまって、動けなくなってしまいました。この地域で家庭を築いて、ここに馴染んで、自分の足場を作っていつている。今はもう、他の土地に行くという選択肢がないんですね、よっぽどのことがなければ。(杉浦・前川2021: 53-54)

開業をするまでは、「関心のある人しか見ていないから、顔を出して活動してもみんな気づかないだろう」と思っていたのですが、今は、地元紙には顔も名前も出さない

ようになっています。『東奥日報』という青森でシェアの高い地元紙から取材を2回ほど受けたのですが、顔も名前も出せないと言ったら、記事にならなかったです。(杉浦・前川 2021: 54)

3-3 真木柗鷹——「性と人権ネットワークESTO」

真木柗鷹は、1998年に秋田市内で「ES-T東北（現・性と人権ネットワークESTO）」を立ち上げ、現在も代表を務めている。しかし、地元のメディアで顔出しをしたのは、団体を設立してから20年後のことだった。

去年「レインボー・フォーラム AKITA」を主催したとき（2018年11月24日）、初めて秋田県内でNHKのニュース番組で取り上げていただいたんですが、それまでは新聞でさえも、顔は出していませんでした。(杉浦・前川 2021: 268)

団体を法人化する計画が持ち上がったときも、アウティングの不安が払拭できず、法人化を取りやめている。

東北にはセクシュアルマイノリティのNPO法人がないんです。理由は、めんどろくさい。メリットがない。雑務に時間が取られるからかな。

法人化しなくても行政とつながれるし、特に困らない。むしろ法人化して登記登録をすると、個人情報を書せなきゃいけないので、そこにはアウティングの不安があるのかもしれない。

(中略)

それに自分の戸籍の性別変更の問題が絡んでいるんです。法人化の話は、実は以前一度あって、設立総会もやったんですけど、代表の個人情報の公開は出来ないと思って「保留させてほしい」と言って、諦めた。みんなに諦めてもらっているという経緯があります。(杉浦・前川 2021: 273)

真木が長らく露出を控えながら活動を行っていたのは、地元での就職活動や家族への影響を考えてのことだった。しかし、50歳を過ぎ「口コミでしか仕事が見つからない」状況になったことで、つまり、一般的な求職活動でなく、自分のジェンダーのこと、自助グループや市民活動で身に着けた専門性のことを知っている人を通じて仕事を得ていくしかない状況になったことで、メディアに顔を出すようになった。メディア露出に関して親の同意も取れた。

メディア露出を避けていたのは、地元での就職活動に影響するのではと考えていたこともあります。ただ、今の仕事は地元ではないし、カミングアウトして働いていま

すし、しかも50歳を過ぎて就職活動をしなくてもなかなか仕事が見つからない、口コミでないと仕事が見つからないという状況になったので、メディア露出を避けるのをやめようと思ったんですね。メディアに顔を出すことについて、親の同意も取れましたので。

自分はいいとしても家族がね。親はまだしも、うちは弟たちの奥さんだったり、従兄弟も多いですから。兄弟や親戚に何かしらの迷惑が掛かるかもしれないとか、「おまえのところのあれはそうなのか」って言われて家族や親戚が困るっていうことがあると嫌だなというので、メディア露出を避けていた。でも一番大きかったのは、地元就職が基本だったので、就職できずに収入が無くなるのが怖かったっていうことだと思いますね。

2017年10月7日に開催した仙台の「多様な性を生きる人のための防災ガイドブック発行記念シンポジウム」でNHKのニュースに出たときも、宮城県内だけだから顔を出したんです。あれが秋田のテレビ局や新聞だったら、まだためらったかもしれません。

用心はしますね。2008年まで派遣社員をやっていましたが、あと半年で正社員雇用の話をしようと思っていたところにリーマンショックが起こって、派遣切りにあいました。リストラされた後は、恩師の選挙事務所にいたときに知り合った知人に就農実習生として雇用してもらい社会保険に加入していたので失業給付が受けられて、震災のときは男性でポリテクセンターに通っていました。地元での就職しか考えていなかったのので、どこから情報が漏れてどんなトラブルに巻き込まれるかもしれないっていうのは予測不能だったので、メディア露出はしないようにしていました。(杉浦・前川 2021: 268)

3-4 「可視性の政治を完全に拒絶しないが、完全に引き受けることもしない」というやり方

ソウや真木は、団体の代表として可視化の要請があることを理解したうえで、露出を管理してきた。家族や仕事への影響を考慮してメディア露出を控える、地元の新聞社やテレビ局を控える、大丈夫だと判断できるときに出る、など、露出の範囲や時期をコントロールしてきた。このような実践から、「可視性の政治」を完全に拒絶しないが、完全に引き受けることもしない、という柔軟なやり方 (Gray 2009: 166) を見てとれる。

「家族も仕事も大事」というのは、当然のことのように思われるかもしれない。しかし、市民活動家にも私生活があり、私生活の変化が活動に影響を与える、という当たり前のことが、これまできちんと取り上げられてこなかった。これにはそれなりの理由がある。

性的マイノリティを対象とする国内の研究は、定位家族（自分が生まれ育った家族）の抑圧面に焦点を当ててきており、性的マイノリティが見せる家族や親族への配慮は、あまり注目されてこなかった。この背景には、「定位家族から離脱することで性的マイノリティと

しての生活、アイデンティティ、活動が可能になる」という歴史記述の影響や、この物語に埋め込まれたメトロノーマティヴィティの影響が少なからずあると思われる。活動する性的マイノリティは、家族のしがらみから自由な、フットワークの軽い単身者としてイメージされやすい。

2014年に『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』を上梓した三部倫子は、既存の家族論が性的マイノリティと定位家族を対立させてきた、という問題を指摘している。多くの家族論は、異性愛規範が埋め込まれた近代家族という「制度」がレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（LGB）の疎外の根源にあることを熱心に論じるあまり、あるいは、疎外されたLGBの多様な生き方に「制度」を変革する力を見出して過大評価するあまり、「親の立場を配慮したり、親の愛情を求めたり、親から離れがたい感情を吐露し」（三部2014: 11）たりするようなLGBの子と親のありふれた現実を見落としてきた。「LGBと異性愛家族を対立させるのではなく、異性愛家族を生きる人間としてLGBを捉え」（三部2014: 11）る、という視点が抜け落ちていたのである。露出して活動に打ち込むリーダーは、なおのこと、異性愛家族を生きている者として認識されづらいのかもしれない。

団体の主催者にとって「仕事が大事」なのは、活動が生活の糧にはなり得ないからである。そして、「活動では食べていけない」という問題は、都市部と比較して、地方のほうがより深刻だと思われる。現在、青森市内を活動の拠点とする岡田実穂（レイプクライシス・ネットワーク）は、かつて大阪や東京などの都市部で活動していたが、その経験にもとづいて、次のように指摘する。

トヨタ財団の助成事業で、活動を担ってくれる人を増やそうとしましたが、難しかったですね。地方の活動は、仕事につながる要素がない、というのが大きいのかもしれません。都会で活動していると、キャリアにつながる可能性が少しはある。でも、地方では一切ないし、むしろキャリアにとってはマイナスになる。（杉浦・前川2021: 33）

活動を通して得られる知識、スキル、ネットワークなどがキャリアにつながりにくく、かつ、良質な雇用を得にくい地方で暮らす。この条件のもとでは、家族や親族との良好な関係を維持することは、十分に合理的である。関係が良好である限り、家族がもっとも頼りになる（と感じられる）セーフティネットだからである。

また、地方に限らず、市民活動の担い手を増やすのは難しい。代表の交代を実現するのはさらに難しい。したがって、代表個人が無理なく活動を続けられることは、団体の安定的な継続と直結している事柄である。このような状況において、私生活への影響を考慮した「露出」の管理は、ますます重要性を帯びてくる。

4——「露出」を前提にしない実践

市民活動の担い手に求められる露出や、私生活に優先して活動に没入するリーダーのイメージ。こうした役割期待への違和感を大事にしながら活動を展開してきた MEME の実践を紹介する。

4-1 「クローゼットもカミングアウトもひとくくりにはできない」

MEME は、2010年9月に交流を目的にした「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」を立ち上げた後、仙台市で開催された「可視化を目指したイベント」のいくつかに関わってきた。たとえば、2015年と2016年に2年連続で開催された「東北レインボー SUMMER フェスティバル」では、運営面で中心的な役割を担っている。しかし、MEME 自身は「身元がばれないように発信する」ことにこだわってきた。そのこだわりは「私がカミングアウトしない理由～CLOSET IN JAPAN～」(2016年3月20日)という企画で十二分に表現された。

この企画が立ち上がったきっかけは、「OUT IN JAPAN 東北プロジェクト」という、可視化プロジェクトである。「OUT IN JAPAN」は、「セクシュアル・マイノリティにスポットライトを当て、市井の人々を含む多彩なポートレートを様々なフォトグラファーが撮影し、5年間で10,000人のギャラリーを目指すプロジェクト」⁶⁾で、「NPO 法人グッド・エイジング・エールズ」が主催する。MEME は、「OUT IN JAPAN」の東北地方での撮影会を手伝いつつ、次のように考えたという。

OUT IN JAPAN は、「あなたの輝く姿が、つぎの誰かの勇気となる。」がキャッチコピーです。それで、レスリー・キーがおしゃれな写真を撮ってくれる。でも、そういうふうに表に出たくない人もいるし、表に出ることばかりが正義ではない。それはそうだということは、ホームページでも触れられてはいるのですが……。でも、あえて顔を出さない人は、かき消されがち。世界的なプロに写真を撮ってもらえるけれど、あえて出ないという人たちがいて、その人たちにも多様性があるということを見せられないか、と思いました。(杉浦・前川 2021: 123)

このアイデアが、「私がカミングアウトしない理由～CLOSET IN JAPAN～」⁷⁾という交流会を生んだ。当初は「クローゼットがぼそぼそしゃべる会」になりそうだと思い描いていたが、「OUT IN JAPAN」を主催する団体の協力を得ることができたため、「カミングアウト／クローゼットの多様性を語り合う場」として位置づけ直した。

実は、当初のアイデアは、クローゼットが集まって愚痴を言ったりとか、キラキラ⁸⁾の悪口を言ったりする程度でした(笑)。でも、当時、私は女性限定のイベントし

かやったことがなかったので、性別不問の交流会をやっていた「てんでん宮城」の namihei さんを引きずり込んだんですね。ありがたいことに企画に関心を持っていただいて、「てんでん宮城」と「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」との合同交流会という形にしました。

それから、グッド・エイジング・エールズの協力も取り付けました。(中略) そうなると「クローゼットがぼそぼそしゃべる会」というわけにいかず、「カミングアウト／クローゼットの多様性を語り合う場」というコンセプトを設定しました。

当日は、太白区にある市民センターの和室に 58 人が集まりました。「♀×♀お茶っこ飲み会」もほぼ毎回そうなんですけど、主催はお茶だけ準備して、あとはみんなで語り合ってください、という感じ。だから、グッド・エイジング・エールズのスタッフの人たちや地元の人たち、被写体になった人もならなかった人も、いろいろな人が混ざってお茶を飲んでいる、といった様子でした。(杉浦・前川 2021: 124)

このテーマ設定の新奇性は、「クローゼット」だけでなく「カミングアウト」もひとくりにできない、という着眼である。この企画は、それぞれの内部の多様性を浮かびあがらせることで、クローゼットとカミングアウトの間に確固不動の境界線を引けないことを明らかにする。

参加した皆さんには、付箋にコメントを書いてもらい、それをまとめて発信しましたが、クローゼットもカミングアウトもひとくくりにはできない多様性がある、ということを見せられたのでは、と思います。「こういう企画もやれるなんてバランスが取れていて良いね」という評価もあり、多少は「OUT IN JAPAN」のためにもなったんじゃないかな、と勝手に思っています。(杉浦・前川 2021: 124)

4-2 「ガンガン表に出るか、ひっそり生きるかの 2 択じゃない」

MEME は、性的マイノリティが露出することの意味を十分に理解したうえで、自身は、「地に足の着いた自分の生活を維持しつつ、意見を表明したり、交流したりする」方法を模索し、実践しようとしている。その理由を次のように語る。

勢いでわーっと表に出たら、それって取り消せなくなります。とくに今は LGBT ブームで、当事者性をカミングアウトして顔を出せば、メディアに出られるとか、何ならビジネスにもつなげられるんじゃないか、といったノリもある。「♀×♀お茶っこ飲み会」みたいなしょぼいことをやっているアカウントにも、若い人から「LGBT を仕事にしたいと思ってるんですが、これはお仕事でやってらっしゃるんですか」という問い合わせが来たこともあります。「いやいや、金稼げてるように見える？」と思いましたが、もう勢いでどンドン表に出ちゃえ、といったノリがあるのかな、と思うんです。

でも、90年代にもゲイブームはあって、その後、停滞した歴史もありますし、今のブームもいつまでも続くわけがない。そんな中で、地に足を着けた暮らしは大切だと思います。だって、いくつまで生きるかわからないですけど、100まで生きるのも当たり前になってきている時代ですよ。

表に出ることが悪いことだとは、まったく思っていない。それも非常に意義のあることだと思います。でも、表に出ないと世間に意見を言えないし、誰にも知ってもらえない、というのは違うのではないかと。ガンガン表に出るか、ひっそり生きるかの2択じゃないことを伝えたい。だから、私自身は、名前を出さないことにこだわりつつ、情報発信をしています。こういう形でも世間に意見を発信できる、ということを示したいです。

まあ、こういう形も、ある意味「カミングアウト」なのかもしれないです。実際「CLOSET IN JAPAN」をやったとき、ネットなどでわりと好意的な意見が多かった中で、一部の人が「世界中にネットで意見さらしとして、クローゼットとか変だよ」と絡んできたんです。

でも、クローゼットとかオープンとか、はっきりと線引きできるものでもなく、グラデーションです。確かに、顔も本名も出さないとメディアが取り上げてくれなかったり、声を届けづらかったりしますが、それ以外にも発信する方法はある。地に足の着いた自分の生活を維持しつつ、意見を表明したり、交流したりすることは十分できる。いろいろなやり方があるんだ、それも多様性だ、ということを伝えたいですね。(杉浦・前川 2021: 124-125)

4-3 仮装して人前に入る

さらに、MEMEは「東北レインボー SUMMER フェスティバル」というイベントで、ドラッグクイーンのユニットの一員としてステージに上がっている。クローゼットかオープンかが判然としない「仮装」というやり方で、人前に出ているのである。

「東北レインボー SUMMER フェスティバル」に関わって、私の中でいちばん大きかったのは、仮装をするようになったことでした。「Anego Girls®」というドラッグクイーンのユニットに参加して、ステージに上がりました。「震災前から活動をしているんだけど、今メンバーが減っているし参加しない?」「仮装すればステージに上がってもいいんじゃない?」と誘われて、軽いノリでダンスパフォーマンスをしました。芸名も「女郎蜘蛛魅牙(ジョロウグモミサエ)」と付けて。何となく思い付いただけなんですけど。

それまで人前に出たのは一度だけ。第3回国連防災世界会議(2015年3月、仙台市)の関連イベントとして、「レインボーアーカイブ東北」がトークイベントを開催したことがあったんです。ゲストに仙台市在住の漫画家井上きみどりさんをお迎えして、私

も素顔で登壇したのですが、それは規模も小さかったし、顔のわかるような写真は外に出さないでくれ、と頼みました。ただ、それは例外で、基本はトークイベントへの登壇は絶対にしませんでした。

でも、仮装することで、「まあ、この格好なら人前に出るのもアリかな」というふうに思えた。自分の中で行動の幅が広がったのは大きかったですね。ただ、ステージから下を見ると、どう見ても仕事関係の人がいて、ばれてないかな、と不安になったことなんかもありました。今でもばれているかどうか、不明です。この格好で新聞にも載ったのですが、今のところ大丈夫と信じています。「いや、バレバレだよ」みたいな説もあるんですが、たぶん大丈夫でしょう。(杉浦・前川 2021: 122-123)

4-4 「クローゼット／カミングアウト」の二項対立を攪乱する

性的マイノリティの市民活動では、可視性の政治の重要性が唱えられ、活動の中心となる者に、顔を出して困難を訴えたり、市民的・社会的な権利を求めたりすることを期待してきた。本稿では、そうした期待を知りながら、それとは異なる方法を探るリーダーらの実践——「露出」を管理する実践と「露出」を前提としない実践——を具体的に紹介してきた。

ところで、「かれらの実践が地方だから生み出された」と解釈することには、慎重でなければならない。市民活動を仕事にしている人は、都会でも限られている。生活の糧を活動以外から得ている人がほとんどだとすれば、ソウや真木のように「(クローゼット) イン」と「アウト」を管理しながら出入りすることは、活動に関わる性的マイノリティにとって常態と言えるのではないだろうか。そうであるならば、MEMEが指摘するとおり、「クローゼット」と「カミングアウト」の厳格な線引きは困難である。

「カミングアウト／クローゼット」「可視性／不可視性」を、排他的な二項対立ではなく「グラデーション」としてとらえることは、MEMEのような「イン」とも「アウト」とも言いがたい「露出」の仕方を模索するうえでも有用である。また、「イン／アウト」の境界を曖昧にする実践は、「クローゼット」を、「地方」や「田舎」を押し込める閉じた空間として想像することを難しくし、ひいては、地方を周縁化するメトロノーマティブな物語を成り立ちにくくする。なぜなら、メトロノーマティブな物語こそ、「カミングアウト／クローゼット」の二項対立を必要とする当のものだからである。

さらに、ソウや真木の「露出」を管理する実践からわかるのは、その実践において意味をもつ空間カテゴリーは「地方」ではなく、「地元」だということである。真木は、NHKニュースに出演したときのことを「宮城県内だけ (の放送) だから顔を出した」「あれが秋田のテレビ局や新聞だったら、まだためらったかもしれない」と語っている。「地元」の秋田か、それ以外の場所 (ここでは宮城) かということが判断の拠り所である。ソウは、活動を始めた当初、顔を隠していなかった理由として、「地元」の弘前市ではなく、青森市で生活をしてきたことを挙げている。また、顔出しを控えるようになったのは「地元」で家族と

仕事を得たことであり、とくに露出を控えているのは「地元紙」であった。むろん、都市部の出身者も、都市のどこかに「地元」をもつ。このことは、「都市／地方」という二項対立が性的マイノリティの経験や活動を分析する枠組みとしてそこまで有用ではないことを示しながら、「カミングアウト＝都市」「クローゼット＝地方」という概念的な結びつきの自明性を揺るがすものである。

加えて、ソウが活動を始めたとき「5年ぐらい関東のほうにいたので、いつでも逃げられると思っていた」と語っていることも注目に値する。ソウは当時、住まいのあった青森市だけでなく、地元の弘前市と、かつて暮らした首都圏の少なくとも3カ所に移動可能であった。ソウは、いつでも移動できるという意味で「都市」に属しており、このことが青森県という「地方」での活動を後押しした。いま「地方」に在者にとって、「都市」はかならずしも絶対的な他者性を帯びているわけではなく、利用可能な資源として意識される。個人のなかで「都市」と「地方」とが排他的に存在するわけではないという事実は、「地方」を自己完結した空間として想定するメトロノーマティヴィティを攪乱するものであろう。

—— おわりに

最後に、露出しないことは、ここで紹介した活動家たちにとって後ろ向きな選択ではない、ということを確認しておきたい。かれらは、地元に残る方法を模索する過程で、活動を始めている。地元で生きていくために地元を変えたい。これが活動のモチベーションである。露出しないことは、活動を無理なく継続するための合理的な戦略である。それは、家族や仕事につながりながら安定的に活動するための、あるいは、活動を通して家族や仕事や地域を再構築していくための、前向きな選択である。

本稿では、東北地方の活動の担い手による「露出」に対する向き合い方や手法について考察した。性的マイノリティとして可視化されることのメリットが少ない場所は国内にあまた存在する。表に出られない個人的な事情もいつでも抱え得る。そして、それぞれの場所や事情に即した無理のないやり方がある。そのやり方を再評価することで、活動への心理的ハードルが下がること、担い手のすそ野が広がることを願っている。

《注》

- 1) 2018年のインタビューの聞き手は、Natasha Fox (University of British Columbia, PhD Candidate・当時)と杉浦(筆者)だった。2019年の聞き手は、前川直哉(福島大学)と杉浦だったが、「ろう LGBT 東北」のインタビューのみ内田有美(「性と人権ネットワーク E S T O」運営スタッフ)と杉浦だった。
- 2) 報告書に掲載したインタビューの多くは、東京大学 REDDY 公式サイト (<http://www.reddy.e.u-tokyo.ac.jp/>) で読むことができる。なお、この調査研究は、JSPS 科研費 17H00978「多様性の経済

学：帰納論的ゲーム理論の構築とその応用」の助成を受けたものである。

- 3) このような物語は、地方や田舎に住む性的マイノリティの現実に、必ずしも当てはまるわけではない。実際には、都会に移住したいと思う人もいれば、そう思わない人、そう思ってもできない人、都会に出てはみたものの肌にならずUターンする人など、様々な人がいる。都会に出た理由も、「地方の保守性」とは限らないだろう。性的な差異に気づく前に、進学や仕事のために、言い換えれば、階層的な上昇移動を目指して都会に出た、という人も少なくないと思われる。
- 4) 「存在を誇示しないことで当事者を引き寄せる」というやり方は、たとえば自助グループの活動で採られているものであるが、ゲイ・タウンのバーやクラブなどでも戦略的に採られてきた手法である。この手法については、筆者らが実施したインタビューでも詳細に語られている。別稿で論じる予定である。
- 5) 「アライ ally」とは、マイノリティを理解し援護する人のことを指す。マイノリティの非当事者を指して使われることが多い。
- 6) 「OUT IN JAPAN」の公式HPより引用。http://outinjapan.com/concept/ (2021年10月24日閲覧)
- 7) 当日の様子は、ブログ記事「交流会『私がカミングアウトしない理由～CLOSET IN JAPAN～』開催しました！」にくわしい。
https://blog.goo.ne.jp/ochakkonomi/e/a7a030ff0bbef7a3b7fdaa0da5e03c0c (2021年10月24日閲覧)
- 8) 「キラキラ」は、SNSに恋人や友達のおしゃれで楽しそうな日常写真を投稿するゲイを指して、2010年代半ば頃から使われ始めた言葉である。現在は、仕事も私生活も充実しているように見える性的マイノリティ全般に対して使われている。「シャイニー」ともいう。

《文献》

- D'Emilio, John 1983 "Capitalism and Gay Identity," Ann Snitow, Christine Stansell, and Sharon Thompson (eds.) *Powers of Desire: The Politics of Sexuality*, New York : Monthly Review Press. = 風間孝訳 1997 「資本主義とゲイ・アイデンティティ」『現代思想』臨時増刊、25(6): 145-158
- Gray, L. Mary 2009 *Out in the Country: Youth, Media, and Queer Visibility in Rural America*, NYU Press.
- Halberstam, Judith 2005 *In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives*, NYU Press.
- 川坂和義 2008 「『カミングアウト』の困難」『Gender and Sexuality』3: 59-76
- 大坪真利子 2020 「性的マイノリティのカミングアウトの根拠としての『不可視』論再考」『WASEDA RILAS JOURNAL』8: 41-51
- 三部倫子 2014 『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』御茶の水書房
- Schweighofer, Katherine 2016 "Rethinking the Closet: Queer Life in Rural Geographies," in Mary L. Gray, Colin R. Johnson and Brian J. Gilley (eds.) *Queering the Countryside: New Frontiers in Rural Queer Studies*, NYU Press, 223-243.
- 杉浦郁子・前川直哉編 2021 『東北地方の性的マイノリティ団体 活動調査報告書』
- Thomsen, Carly 2016 "In Plain(s) Sight: Rural LGBTQ Women and the Politics of Visibility," in Gray, Johnson and Gilley, 244-263.
- 横山陸 2019 「『LGBT』にとって『地方』はいかなる場か——ルーラリティをめぐる語りの分析から」2019年度日本女性学会大会、2019年6月16日、一橋大学国立キャンパス